■白鷹町の山の印象

令和４年春に白鷹町にはじめて来て、「雪と緑（森林）と花のコントラスト」にびっくりしたというのが山を見た第一印象でした。林業の視点から山を見れば、傾斜が緩やかで雄大に広がり、地形的に林業に向いていると感じました。

そして、里山に薪炭山、少し入って行けば人工林、奥の山は天然林と色分けがされており、先人たちがしっかりと生活と林業の色分けがされた山づくりをしてきたと感じました。

■白鷹町の木材

白鷹町の杉の特徴は背丈が高く、林齢の割に太さのある杉材です。よく九州の木は暖かいから太くなると言われますが白鷹の木の方がずっと太いです。

これは、白鷹町の地形や気候が影響しており、適量の雪が降ること、盆地地形、そして最上川が南北に流れることで四季がしっかりしていることがあげられます。

特に春・秋の寒暖差により、杉が太り、程よく雪が降るため、木の成長への影響が少なく、春先の水が必要な時にしっかり水を蓄えられることが成長を促していると考えられます。

■白鷹町の林業の強み

昨年度より本格的に白鷹町の山に入って仕事をしていますが、感じたことは、１㌶当たりの収穫量が非常に多いということです。１㌶当たり４５０立方㍍の丸太が取れれば、良質な森林と言われる中で白鷹町の多くの林地はそれを大幅に上回る材積の収穫量が期待できます。これまでの実績を見ても、ほとんどの森林で１㌶当たり６００立方㍍以上の収穫があります。

また、マツクイムシの影響で全国的に確保が難しい赤松がまだ残っているのも強みです。梁材や合板用で通年需要があり、杉一辺倒の林業に比べて経営の安定という意味でも非常に大きな資源です。

■目指すべき これからの林業

まずは、伐って・使って・植える・育てるの「緑の循環システム」の確立です。次の世代につながる林業、森林環境を作っていくことが重要であり、「緑の循環システム」の確立が地域の経済循環を促し、地域づくりまでつながるものと思っています。また、天然林（広葉樹）についても二酸化炭素削減など地域環境を守るため大きな役割があります。それらもしっかり守っていくことが大切であると考えます。

本藤（ほんどう） 幹雄（みきお）さん

物林株式会社 新事業推進部 白鷹プロジェクト担当。愛媛県久万高原町に林政アドバイザーとして従事。みえ森林・林業アカデミー講師、愛媛大学農学部社会人リカレントコース講師のほか林野庁主催研修講師も務める。

【物林株式会社】
国内外に拠点を有する森林（もり）と緑の総合商社（林業・木材流通、公園管理、建築等）
まちづくり複合施設建設時より白鷹町との関わりがあり、令和５年４月に林業の振興と地域の活性化に向け、白鷹町と連携協定を締結。

森林（もり）と共に

白鷹の山で働く人

山で働く人たちがいるから森林は守られている

■林業現場の現状

林業は、「木を伐って・植えて・育てる」というスケールの大きな仕事です。確かに暑い中での下刈りや作業中のハチ刺されなど大小危険な場面もありますが、近年は林業機械の発達により、作業の効率化が図られ、安全にも配慮した産業に生まれ変わってきています。

しかし、林業についても、他産業と同様に従事者の高齢化と若手従事者の減少が課題であり、担い手の確保が急務となっています。また、それらを補う意味でもＤＸ、スマート林業の導入が不可欠であると思っています。

■これからの山づくり

現在、山形県は伐期に達した木を主伐して再造林する流れになっています。

これからは、「伐ったら植える」を実践し、次世代に残るように林齢の平準化を図っていく必要があると考えています。

また、これまでのような杉一辺倒の山づくりではなく、土質や地形などを考慮したマツや広葉樹なども含めた適地に適した木を植林するという山づくりが必要だと思っています。

そして、人工林は手をかけていかないと良い木はできません。少しでも所有者に山に関心を持ってもらうためにも、価格の安定に向けた取組や、次世代も山の手入れを行っていける人材の育成が重要だと思っています。

佐藤（さとう）　聖之（まさゆき）さん

西置賜ふるさと森林組合森林整備課係長。森林整備事業などの現場管理業務を主に担当。
その他、地元猟友会に所属し有害鳥獣駆除に従事する。飾り炭作りなども実践。

【西置賜ふるさと森林組合】
平成11年４月　白鷹町、長井市、飯豊町の各森林組合が合併して発足。組合員約2,000人。森林整備事業に取り組むほか、特用林産物販売、樹木の病害虫防除、林業家の経営指導など多様な業務を担う。令和４年度は、植林後の下刈り・間伐など管内約165㌶の森林整備を行った。